

平野哲也『江戸時代村社会の存立構造』

渡辺尚志

I

本書は、下野国を中心的なフィールドとして近世村落史研究を続けてきた若手研究者・平野哲也氏（以下、著者という）の初の単著である。まず、各章ごとに概要を紹介しつつコメントを行ないたい。

序章では、①戦後の近世史研究においては農村内のさまざまな社会関係が克服・打破の対象とされてきたこと、②1980年代以降、村の自律性や歴史的意義を肯定的に捉えようとする研究が進展したこと、③近年は、白川部達夫・大塚英二・評者らにより、村そのものに寄り添うかたちで、村がもつ多様な機能・役割が具体的に解明されていること、が述べられる。著者は、③の潮流を「支持し、この方向性を継承したい」とするが、この潮流に対してもいくつかの疑問点を指摘している。また、本書が対象とする下野国芳賀郡に関わって、「関東農村荒廃論」に関する従来の諸研究を批判的に検討している。

第1章「関東における主穀生産地帯の特質」では、芳賀郡の地域的特質が検討され、同郡が米作中心の主穀生産地帯であり、米生産を中軸としつつ、麦・大豆・実綿など多様な畑作物を組み合わせた農業生産が営まれていたことが述べられている。こうした地域特性がいかに形成されたかについて、給部村綱川家の近世初頭の耕地開発過程を事例に検討されているが、この部分は史料不足もあってか、開発の具体相（開発労働力の編成のされ方など）がやや不鮮明な感がある。しかし、それ以外は、米穀生産の動向を全国的な米価変動と結びつけて説明するなど、郡を越えた広い視野から多角的な検討がなされており、説得的である。

第2章「耕地資源の活用とその主体」では、居村に根差した村方地主が小百姓と一体となって耕地資源を活用し、地域経済を動かしていたことや、その

際、百姓たちは自然環境の維持に対する配慮・努力を怠らなかったことなどが、田畑輪換、耕地交換、多毛作や合理的な作目構成、生産物や肥料の流通・販売など多様な側面の分析を通じて主張されている。そして、著者は、18世紀後半以降の手余荒地の増大を、米穀市場の変化に百姓が機敏に対応したことの結果としてとらえ、そこに百姓の市場対応力と労働力配分の巧みさを見出すとともに、耕地の荒地化は過剰開発した耕地を自然に返す意味ももったと評価している（この点についてのコメントは後述）。村の土地利用には、個々の百姓のみならず村の意思が介在していたこと、村方地主・村役人層が広域にわたるネットワークを形成し、それを利用して村外の資金を村内の百姓に融通していたこと、などの指摘は重要である。

第3章「山と川からの商品生産」では、山と川における百姓の商品生産の実態が、薪炭生産を中心に述べられている。著者は、18世紀中期以降における山林資源の商品化の展開は、江戸の需要に呼応した、百姓の積極的な経済活動の証であり、当該期の米穀生産の減収を補う意味ももったこと、そこでは村方地主が主導的な役割を担い、小百姓も稼ぎの場を求めて積極的に参加したこと、などを指摘し、「芳賀郡での山林資源の商品化は、山林地主を富ませ、木こりや木挽稼ぎ、材木輸送など、それに関わる多くの就労機会、収入源を百姓に提供し、地域社会全体へ確実に利益をもたらした」（197頁）との積極的評価を行なっている。評者は、そうした側面をふまえたうえで、さらに林産物の生産・販売をめぐる、村方地主・小百姓・河岸場の商人・江戸問屋などでの利益配分の実態や、相互の思惑のズレと一致の具体相などを掘り下げることが必要だと考える。

第4章「百姓の生業の多様と選択」では、従来「農村荒廃」期と捉えられてきた18世紀中期以降においても百姓は生活文化の豊かさを享受しており、荒地の増大も、市場動向をにらみつつ、条件のよい生業に積極的に乗り出していく百姓の主体的行動の結果として理解すべきだと主張されている。「農村荒廃」期にも百姓は旺盛な消費欲を示しており、主体的によりよい稼ぎ先を探していたとの指摘は、従来とは異なる百姓像を浮き彫りにしており興味深い。

ただし、借金をしてまでも物質的な豊かさを追求する百姓の消費行動の行き着く先には、単純な貧窮化とは別の意味での困窮が待ち受けていたのではないかという疑問も残る。

また、著者は、百姓の離農・離村を、百姓が市場のあり方に応じてより稼げる生業のあり方を絶えず模索した結果だと言う。百姓の「経済人」としての有能さ・機敏さの積極的評価である。しかし、この点は必ずしも小百姓の意識の具体的分析に基づいたものではない。離農・離村を決意するとき、百姓の心中には何の葛藤もなかったのであろうか。離農・離村した百姓は、果たしてさらなる豊かさと安定を手に入れることができたのだろうか。小百姓の生活実態や意識についてはまだまだわからないことが多く、この点は著者のみでなく、近世村落史研究者全体で解明していくべき課題であろう。

さらに、百姓の離農・離村は、村のあり方に否定的な影響を与えなかったのであろうか。著者は、村が積極的に百姓を村外に押し出していたというが、著者があげる東水沼村の事例（265頁以下）でも、村役人は積極的に百姓の出奉公を推奨しているわけではなく、あくまで消極的な対応である。経済的有利性を判断基準とする百姓の離農・離村行動は、残された村人にマイナスの影響を与え、やはり一定の荒廃局面を現出させたように思われる。

第5章「協同組織としての前地主・前地関係」では、これまで名子・被官などと同様の隷属農民と理解されてきた前地を取り上げて、従来とは異なる視角から再検討している。検討の対象は、給部村綱川家（前地主）とその前地である。そして、①元禄期の逃散運動を通して、前地は、主家や村の本百姓からの過重負担の要求を回避し、自家の経営権を強化したこと、②それ以後の前地主と前地との関係は支配-従属関係とはいえ、前地が綱川家の構成員として、その運営に参画し、発言権を行使するという協同・共存の関係であったこと、などが述べられている。①の点に関しては、元禄期より前の時期の前地主と前地の関係が不明だという問題点が指摘できる。著者は、それを「たんなる人格的關係」（290頁）、「無規定・無原則の關係」（294頁）などと言うが、その具体的内実が史料に即して説明されている

わけではない。また、逃散の理由を主家や本百姓による過重負担の強要に求めているが、逃散に関する史料からはそのことを直接には導き出せない。②の点については、綱川家の炭生産に関して、「前地自身が、綱川家に地域的規模での炭の増産を要請し、事業への参画を企図」（321頁）したとする点に史料の根拠を欠くなど若干気になる点はあるものの、前地の実像を多方面から明らかにした点は高く評価できる。また、天保期以降、前地と前地主による強大な経営体の構築が、「両者の利害・思惑の衝突と協調の繰り返しのなかで形成されてきたもの」（332頁）との指摘は正しく、この点をさらに具体的に追究することが望まれる。

第6章「村方地主と小百姓の協同による村運営」では、東水沼村岡田家を事例に、村方地主かつ名主であった同家と小百姓との関係と、両者を含めた村社会の構造が検討される。そして、岡田家は、自家と小百姓との結合強化によって、互いの経営・生活を安定させることに努め、小百姓もそうした面での貢献を岡田家に求めていたこと、19世紀には、岡田家と小百姓の協同による村運営が進展していったこと、などが指摘されている。地主・村役人層の一つのあり方を典型的に示すものとして、岡田家の事例は興味深い。評者個人としては、本書全体のなかで一番面白かった。

本章の「はじめに」において、著者は評者を批判して、「（評者の議論では）同じ「在村型豪農」も、「貧農・小前層」や「村落共同体」の安定・発展を重視するタイプと、それらを収奪基盤として私利私欲に走るタイプとに区別されるが、大切なのは、両者の差がなぜ生まれたか、その分岐点の解明である」（340頁）と述べている。この指摘自体は妥当だが、肝腎の分岐点がいついかなる事情と背景のもとに生じるのか、本章で具体的に解明されているわけではない。村方地主が岡田家のような行動をとらない場合には糾弾されるという見通しが示されているだけであり、この点は依然課題として残されている。

第7章「土地慣行・百姓相続にみる村仕法」では、天保～幕末期にかけての百姓や村の能動的な営みが、土地慣行と百姓相続の両面から検討されている。そして、①幕末においても、無年季質地請戻し慣行

(以下、慣行という)が個別百姓の利害に優越し、村全体の安定を維持する社会秩序として強い効力を保っていたこと、②幕末期における村外地主の勢力伸張に対して、小作人は村の力を背景に永小作権を確保し、地主と小作人が協同して、より合理的な農業生産を継続していったこと、③村が、社会経済状況の変化に応じて、百姓数を増減させ、百姓株の維持と再興を主導していたこと、などが述べられている。

①の点については、質地請戻し争論の類発自体が、幕末における慣行の動揺を物語っていることを指摘したい。また、著者のあげている事例では、争論の経過をみても、必ずしも慣行に基づく質入主側の主張が通っているわけではない。よって、幕末期における慣行の強固な存続のみを主張することはできず、確かに存続はしているがそれは動揺しつつあったと考えるべきであろう。ただし、著者が、同じ慣行でも、百姓の志向の時期的変化にともなって現出の仕方が変わっていることを指摘している点は重要であろう。②については、評者も著者の理解を基本的に支持したい。ただし、同じ地主といっても、村外地主のほうが村内地主よりも小作人・村との関係は疎遠であり、そのため摩擦が発生する可能性はより高かったことに留意しておく必要がある。

終章では、本書の成果が要約されている。

II

次に、本書全体についてのコメントを述べたい。

第一は、著者の研究史理解に関する点である。著者は、戦後の近世史研究を佐々木潤之介氏に代表させ、氏の研究を、近代的個人や近代的自由の発展を阻む近世農村を克服・打破の対象としたものとして、否定的に評価している。また、1980年代以降の村落史研究を水本邦彦氏に代表させて、水本氏が村落自治に着目した点は評価しつつも、それは行政的・法制的側面が中心で、百姓の生産・生活に密着した分析が足りないと批判する。しかし、佐々木・水本両氏の研究はこうした整理の枠を越えた豊かな内容をもつものであり、また1980年代までの近世村落史研究は、深谷克己・大藤修両氏をはじめ、多くの研究者によって多彩な蓄積がなされてきており、そこに

は著者の主張と関連する点も少なくない。著者には、今少し丁寧な研究史整理が求められよう。さらに、白川部達夫・大塚英二両氏や評者への批判についても、承服できない点が多い。紙幅の関係で詳細な応答は別稿で行ないたいが、たとえば、評者が地主と小百姓との対抗を軸に共同体論を組み立てているとの著者の批判は、評者が一方で「在村型豪農I」の果たした役割を重視している以上、当たっていないと言わざるを得ない。

著者の研究史整理の仕方と関連するのではないかと思うが、著者の描く村社会のイメージには、共感とともに若干の違和感を覚える。著者は、矛盾・対立のあまりない協同社会、たえず発展を続ける活力に溢れた村社会というイメージを強調するが、村社会の実態は今少し複雑で陰影に富み、実際の歴史過程はより曲折に満ちていたのではないだろうか。この点は、第二、第三のコメントとも関わる。

第二は、「農村荒廃」論の評価についてである。著者の「農村荒廃論」再検討の試みは評価するが、そのうえで、著者は、「農村荒廃」が全くの幻だったと主張しているのか、それとも従来言われているのとは違う意味において一定の荒廃状況が存在したと考えているのかが本書からは読み取りづらかった。評者は後者だと考えるが、著者は、「農村荒廃」現象は「生計の比重を諸稼ぎに移そうとする百姓が戦略的に行った離農・離村や耕作放棄の結果であり、むしろ、百姓の生業の多様と選択が顕著にみられた時期と捉えられる」(477頁)などと述べているところからすると、前者の理解のようでもある。いずれにしても、この点について、著者の明確な考えを伺いたい。また、米価の低迷に直面して、離農・離村という対応をとったところに、他地域とは異なる下野国の地域的個性が表れているとは言えないだろうか。

第三に、著者は、「百姓は、有限な資源を持続的に利用していくために、自然環境と生産・生活環境の調和を保つ努力を惜しまなかった」(478頁)と主張するが、そうした努力は払われたとしても、近年、水本邦彦氏が、近世は自然を改造し自然に圧力をかけ続けた社会であり、その結果災害が頻発していたと述べている(『近世の自然と社会』『日本史講座6

近世社会論』東京大学出版会，2005年，所収）ことを想起するとき，自然と社会の関係についてはより深く追究する必要があるのではないか。また，幕末における盛んな耕地開発には，環境破壊の要素はなかったのだろうか。

以上，疑問点を連ねてしまったが，本書は，①村を扱いつつ，物価の動向や，江戸など町場との交流をも重視していること；②芳賀郡という一地域にこだわり，聞き取りなどの成果も駆使して，村社会の構造を近世全期を通じてさまざまな側面から詳細に解明したこと，などの点で高く評価できる。村社会の重要な側面を明快に描いた重厚な労作だといえよう。

（御茶の水書房，2004年12月刊，A 5判，497頁，9200円）